「東日本・家族応援プロジェクト in 福島 2018」を開催しました

人間科学研究科教授　村本邦子

2018 年 11 月 30 日（金）～12 日 1 日（土）、福島市子どもの夢を育む施設こむこむにて、8 年目を迎える「東日本・家族応援プロジェクト in 福島 2018」を開催しました。特定非営利法人ビーンズふくしまの共催、福島市子どもの夢を育む施設こむこむの協力、福島県、福島市、福島市教育委員会、福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの後援を頂き、漫画展、漫画トーク、クリスマスカレンダーを作ろう、東京おもちゃ美術館寄贈のおもちゃを使った遊びコーナー、おもちゃコンサルタントによる遊び講習会でした。

人気のクリスマスカレンダーには 50 名の参加者がありました。8 年目ともなると、震災の時にはまだ生まれていなかった子どもたちもいることになります。最初の頃に来てくれた子どもたちは、もう成人していることでしょう。子どもたちの成長を見ると、いろいろなことがあっても、時間は変わりなく前に進んでいることを感じます。院生たちも親子との楽しい交流を通じて、福島に思いを馳せ、今後の経過に関心を持ち続けてくれることでしょう。子どもたちが心をこめて書いてくれたアンケートに胸がいっぱいになりました。

「楽しかったです。1 日 1 日のおかしをたべるのが楽しみです。来年も来たいです。ハロウィーンのカレンダーもつくりたいです」(8 歳女)、「すごくわかりやすくおしえてくれた」(8 歳女)、「わたしはいろいろなかざりやモールがあって、すごくかわいくかんせいしました。すごく楽しかったです。くふうしたりいろいろかんがえてわからないところは、お母さんにきいたりしたけど、すごくすごく楽しかったです。ありがとうございました♡(^^)」(8 歳女)、「家で休みがあれば、材料をあつめてまたやってみたいです」(8 歳男）などなど。

お母さんたちからもたくさんの声を頂きました。「子どもと一緒に作成できたので、とても楽しかった。家で何か作ろうとしても、こんなに大きな楽しめるものはなかなか作れないので、おもしろかった。お菓子をつけるアイディアはさすがですが、毎日楽しみです」（40 代女)、「毎回、親子共々楽しく参加させて頂き、今年で三回目になります。来年は子ども皆連れて、また参加できたら嬉しく思います。来年もこのイベントがあること親子で楽しみにしています」(30 代女)、「材料などたくさん用意して頂いていたので、子どもたちも楽しく満足できるものが作れました。とてもすばらしいイベントだと思いました。ありがとうございます」(40 代女)、「ていねいに教えて頂き、子どもたちがとても楽しそうだったので良かったです。ありがとうございました」(30 代女)、「大阪、京都から来て頂いたと聞いて感動しました。また親子の絆も深まり、とても楽しませて頂きました。また来年も来れますように！」(30 代女)

作ろう!

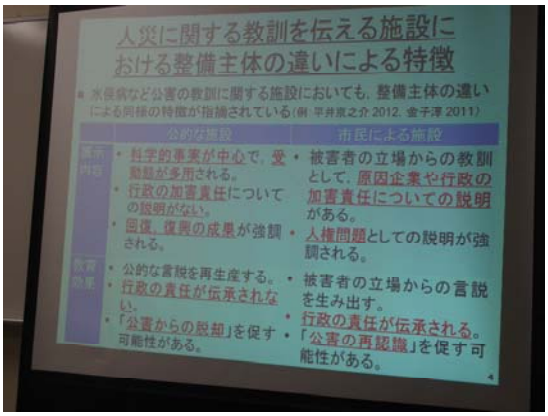
おもちゃコンサルタント小磯厚子さんによる遊びの講習会もいつもながらに勉強になり、遊びコーナーの子どもたちとも楽しく遊ぶことができました。

漫画トークも毎年来て下さる方、初めての方、いろいろでしたが、世代に関わらず楽しく聞いて頂けたようです。「いい年なのにあまりにもわからない事が多く、先生が何を言ってもはじめて聞く話だったり、この年になってもまだまだ知らない事があり、とてもいい勉強になり、来年もまた聞きに来たいと思います」(60 代男)、「社会においては問題が必ず起きるため、問題自体を考えることよりも、問題解決を考えることが大切だということがわかった」(20 代男)、「昨年も参加させて頂きました。お話を伺うと、とても納得し、勇気が出ます。何が正解なのではない。とても大切だと思います。また来年も是非うかがいたいと思いました。遠いところありがとうございました」(40 代女)、「毎回、また考えさせられます。私のまわりも専門家の方々がどんどん増えていくけど、いつもお互いのうまくいかないことの指摘や、何してくれる？の話で終わっている気がします。今回のことを心に留めてやっていこうと思います」(50 代女)。もっともっと人が入ってくれるといいなと思います。

今回のフィールドワークでは、11 月 29 日（木）に先発チームが、白河の原発災害情報センター（NPO 法人アウシュヴッツ平和博物館運営）と三春の福島県環境創造センター（コミュタン福島）を訪れ、夜には、福島大学後藤忍先生によるレクチャー「原発事故の教訓を伝える施設の役割」を受けました。考えさせられることが多くありました。あらためて公的な施設と市民による施設の特徴を聞き、公的施設の限界があるからこそ、市民による多様な施設運営活性化のための支援のしくみがあってしかるべきだと思いました。チェルノブイリ博物館の紹介も大変興味深く、是非一度行ってみたいと思います。後藤先生のお仕事には大変なご苦労が推測されますが、未来に希望をつなぎ、地道な研究に基づいて公正に資料を示し、何が正しいか正しくないかではなく、何をどんなふうに考えたらよいのかの道筋を示唆しようとする姿勢に多くを学びました。

原発災害情報センター

放射線量マップ
〈高い所〉
〈低い所〉

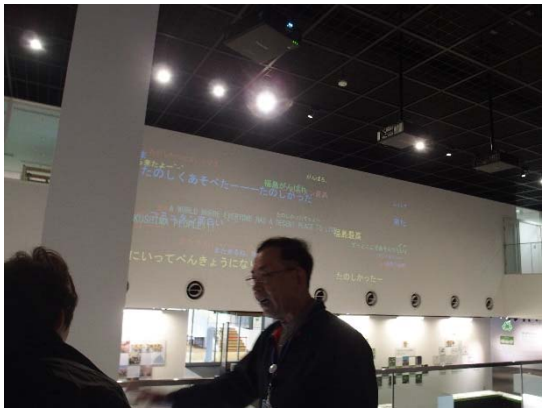


30 日（金）は、ビーンズふくしまの「みんなの家」でお話を聞き、みんな de 食堂に参加させて頂きました。院生たちもたくさんのことを考え感じたようです。

最終日である 12 月 2 日（日）は、NPO 法人福島地球市民発伝所（福伝）の竹内俊之さん、藤岡恵美子さんの案内で、コミュニティバスをお借りし、線量計を首にぶら下げて飯館村⇒南相馬⇒浪江を回りました。車に乗っていても場所によっては線量が上がり、街中でもちょっと山の方に寄ると急激に線量が上がるという体験を経て、たしかに除染され開けた場所は線量が減っているけれど（コミュタン福島と言うように）、美しい光景に我を忘れてちょっと林や森に近づいてしまうともう危ないという日常を実感しました。村内見学の後、「きこり」という村の施設で、福伝による「福島の教訓と日本のジレンマ-原発災害から 7 年目の現実」のレクチャーと、村民である伊藤延由さんのお話を聞きました。ほんの少しだけ語られた伊藤さんのライフストーリーは興味深く、そうやってたどり着いた飯舘村への思いが、こんなふうに飯館に住んで、放射線を測り、飯舘に住むというのはどういうことか情報発信するという現在の活動に結びついていることがよく理解できました。

コミュタン福島

環境創造シアター
Environmental Creation Theater



放射線測定マップ
2018/11/29
2012/04/01

放射線測定マップ
トップに戻る
世界を見る

測ることによって
守られる食の安全
Food safety, protected by monitoring
画面にふれてみよう!

その後、ワークショップ「飯舘村帰還ロールプレイ」を体験しました。与えられた村民

の役で、自分ならどうするかをその根拠とともにグループで話し合い、発表し合うというというものです。とても良いワークショップだったと思います。放射能被害を受けた人々がさまざまな価値観と条件のもと、いずれにしても不本意な選択を強いられている現状に対し、自分自身の価値観を表現することが憚られてしまいますが、自分ならこう考える、自分ならこうするという形でなら、気兼ねなく表現することができます。しかし、迷いのプロセスは同じでも、最終的な選択と決断は人によって違うのだと実感することは、思った以上に辛い現実を突きつけました。ロールプレイとは言え、チームとして共に学び行動してきたメンバーがここから別の道を歩いて行くのだと思えたからです。フィールドワークの学びは大きすぎて、とても書き尽くせません。

ふくしま
地球市民発信所
福島の教訓と日本のジレンマ
ー原発災害から７年目の現実ー

SDGsとは…
2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）ことを謳っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。（外務省HPより）

こむこむの漫画展の前で、お孫さんを連れた男性と立ち話しました。「善意のつもりだろうが、甲状腺が多いなど言われるのは迷惑だ。福島人はもう原発事故を忘れたのか、忘れるなと言うが、忘れられるはずがないではないか。忘れられるものなら忘れさせて欲しい。自分たちも孫とともにここに残ると決めて暮らしているのだ」とおっしゃっていました。選択したものの、お孫さんのことを心配されていることが痛いほど伝わってきました。福島に暮らす人たちに外部の者が「忘れるな」などと言えるはずがありません。問題は、福島から遠く離れれば離れるほど、本当に簡単に忘れてしまえるという現実です。政府も多くのマスコミも、原発事故を終わったことにしようとしています。そうでなければ、原発輸出や再稼働はあり得ないでしょう。

今年も困難な現実に直面させられる福島訪問となりましたが、遠くに暮らす者こそ、都合の良い社会の流れに流されてしまわないよう、しっかりとアンテナを張り巡らせておきたいものです。すべては私たちが暮らす社会と地続きの問題なのです。

２０１８福島

人間科学研究科教授　団士郎

多くの院生参加があり、クリスマスカレンダー作りが大盛況の「こむこむ」での開催。

だがパネルマンガ展の作家として、それに付随して小冊子を受け取って貰いたい作者としては、これまでで最短に近い僅か二日間展示という、そもそもの目的からそれてしまった印象が残る開催だった。

東日本・家族応援プロジェクトとして届けたいものがあり、私達の継続企画故にもたらすことが出来る事の意味を考えたとき、作家としてはこのままの翌年持ち越しには不満が残る。新たな場所で展示期間や、展示スペース確保が、なんとかならないものかと思った。

又、ギャラリーが進化していかない事と、福島が原発被災地であることとが何か関わっているのか、いないのか、思案してしまう今回だった。

クリスマスカレンダー作りの背景には、被災当初、子ども達が屋外遊びもままならない放射線問題があった。そこで教育文化複合施設であるこむこむに呼応する形で現在まで、クリスマスカレンダー作りが実施されてきた。楽しみにしているリピーター親子もたくさんある。

だが一方で、定員オーバー等で、他では見ない不満気味の参加者や、主催側の気遣いなど、一般的な「イベント」主催者と参加者（お客意識）間の、ありがちなストレスも存在した。

日曜日のフィールドワークは早朝起床で出発だったが、学びの多いものだった。飯館村訪問も初めてではなかったが、福伝スタッフお二人と伊藤延由さんも加わった学習プログラムは、よく準備された、思いのこもったものだった。

飯館村は好天で山も空も、自然は見事な復活を遂げている。しかしそこに忍び込ませてしまった「不自然」だけが、線量計の数値を上げ下げする。否応なしに可視化されたフレコンバックの山も続いている。

原発が手に負えないものであることだけが浮かび上がる浪江町の海岸線の広大な空き地が私達に、そこから何を学び取るのかと突きつけていた。

東日本家族応援プロジェクト 2018　in 福島に参加して

人間科学研究科　臨床心理学領域　M1　植木雪音

私にとって東北は、以前から親しみがある地域であった。それは、地元である北海道に最も近い地方であり、その中でも福島県は伯母家族が住んでおり特にそう感じていた。しかし、震災後初めて訪れた福島で考え感じたことは想像以上に大きなものであった。その中でも特に印象に残っていることを記しておきたい。

福島市子どもの夢を育む施設こむこむで行われたクリスマスカレンダーを作る親子向けのイベントでは、多くの子どもたち、保護者の方と関わることができた。幼児から小学 3 年生までの子どもたちが対象であったが、どの子も目をキラキラさせてカレンダーづくりをしているのが印象的であった。私の担当していたテーブルでは、2 年連続で参加している親子もいて昨年までのプロジェクトとのつながりを改めて感じた。完成させたクリスマスカレンダーがそれぞれの家でクリスマスまでの楽しいカウントダウンになり、家族でのコミュニケーションのきっかけになることを願いたい。1 年目のプロジェクトでは、きっと参加したすべての子どもたちが震災を経験していたが、今回のプロジェクトに参加した子どもたちは、震災後に生まれた子も少なくないだろう。そう考えると、7 年という時間の長さを感じるが、復興は時間が解決してくれるようなそんな単純で簡単なものではないと改めて気づかされたのは最終日のフィールドワークである。

最終日のフィールドワークでは､福伝の竹内さん､藤岡さんに案内していただきながら、福島市から飯舘村、南相馬市、沿岸部の浪江町を中心に訪れた。飯舘村では、村民の伊藤さんから震災当時の村の様子、放射能の被害など貴重なお話を聞くことができた。実際に放射線量計を借りて行く先々で測定してみたが、役場付近は除染されているものの山間部などはいまだ線量が高いところがあった。放射線は目に見えない。それがどれほど不安で恐ろしいのか容易に想像することは難しい。村内のグラウンドでは多くの子どもたちが集まっていた。まだまだ復興途中で他の地域に比べて放射線量の高い場所で、未来を担う子どもたちが暮らしている現状を目の当たりにして胸が痛んだ。また、浪江町の請戸漁港に向かう途中、沿岸部に近づくにつれて津波の被害を受けてそのままになっている空っぽの家屋が数軒あった。これまで私は、テレビや新聞、ラジオなどの限られたメディアの情報でしか福島のことを知らずにいた。あの日、あの時福島の地で何が起きていたのか、人々が何を見たのか、何を感じたのか、私には一生かかってもすべて知ることは難しい。それでも、今回実際に自分の目で見た景色、感じた空気はこの地を訪れることでしか得られない大切な感覚であったと感じている。

プロジェクトに参加して当日を迎えるまで、自分にできることや震災から7年が経過した今、するべき支援の意味が明確ではなく疑問もあった。しかし、実際に福島県を訪れて以前よりもその答えがはっきりした感覚がある。その場所でそこに住む人と、同じ時間や空間を共有することに、地域や人々についての理解を深める第一歩があると強く感じるプロジェクトであった。継続するためには、徐々に変化していかなければならないこと、支援を支援のままで終わらせるのではなく、そこで得られたつながりを次のステップに結び付けていかなければならないと考えた。私は、このプロジェクトにおいて感じたことや考えたことを通して「証人」として福島のことを考え続け、学び続けたい。

最後に、今回のプロジェクトに関係するすべての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「東日本家族応援プロジェクト2018　in福島」に参加して

人間科学研究科　臨床心理学領域　M1　上仲　晴菜

私は今まで、福島はおろか東北に訪れたことがなかった。新幹線を降りた肌寒さ、方言がとても新鮮であった。このプロジェクトに参加して学んだことはとても多く、たくさんのことを考えさせられた。3日間を通して印象に残ったこと、感じたことについて報告したいと思う。

1日目の11月30日は、お昼ごろに福島に着き、漫画設営、次の日のイベントであるクリスマスカレンダーの準備をした。夜は、NPO法人ビーンズ福島さんが運営されている事業の1つである「みんなの家」に訪問させていただき、ビーンズ福島さんがされている取り組みや福島の現状についてお話を伺った。福島でどんなことが問題になっていて、どのような取り組みをされているか現地の方からお話を伺うことは今までなく、とても貴重な体験であった。

2日目の12月1日は、クリスマスカレンダー作りのイベント、遊びの講習会、団士郎先生の漫画トークが行われた。クリスマスカレンダー作りを通して多くの子ども達、保護者の方々と交流することができた。どの子どもも楽しそうに作っており、これからクリスマスまで家でも楽しんでいる様子を想像すると、とても嬉しい気持ちになった。遊びの講習会では、「おもちゃで一緒に子どもと楽しむことが大切」という言葉にとても印象に残っていて、おもちゃを通して子どもとコミュニケーションをとることが大事だということに気が付かされとても勉強になった。団士郎先生の漫画トークでのディスカッションの時間では、福島に住む方とお話するこることができた。その方は、以前にも団先生のお話を聞きに来たことがあり、そのときの言葉が印象に残っていたので、今回参加したとお話していた。継続して行っているからこそ聞くことができる言葉であり、活動していることが誰かに届いているということが実感することができる言葉であった。

3 日の 12 月 2 日にはフィールドワークを行い、ふくしま地球市民発電所の方の案内の元、福島市から飯館村、南相馬市、浪江町に訪れた。飯館村では村民の伊藤さんからお話を伺った。実際に放射線量を測りながら回ることで、放射線量がどのくらいなのかがとてもよくわかった。しかし、はじめはどの数値が普通で、どの数値が高いのかどうかさえ、わからなかった。それは、原発事故後すぐの村民の方も同じであっただろうなと感じた。役所や住宅街など除染されていて放射線量が下がっているところもある一方で、7 年たった現在でも山間部ではまだまだ放射線量が多い。そんな山間部がすぐそこにあるところに学校やグランドがあり、子ども達が外で走り回っている様子を見ていて本当に安全だといえるのかと不安に感じた。原発事故後、専門家によって情報が違い何を信じたらいいのかととても混乱していたこと、まだまだ放射線量が高いところがあるにもかかわらず、避難解除されたことを伺った。飯館村でのお話を聞き、正しい情報を伝えることの大切さ、自分で考え判断することの必要性について改めて感じた。

バスにて移動途中、たくさんのフレコンバック、南相馬の防潮堤や、避難指示が解除されていない地域を見ることで、7 年たっても復興できていないということを実感させられた。メディアではあまり報道されなくなり、意識が薄くなってきてしまっていたが、まだまだ問題はたくさんあり、他人事ではなく自分のこととして考えなければいけないことがたくさんあることを改めて感じた。

今まで福島に訪れたことがなく、知り合いがいたわけではなかったため、東日本震災ことをどこか遠い出来事のように感じていた。しかし、実際に訪れ福島の方々と交流し、震災の影響や原発事故のことを聞くことで身近な問題として考えることができた。福島で得た、たくさんの学びを忘れず、これからも福島について考え続け、自分には何ができるのかについて問い続けたい。

最後になりますが、お世話になった皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

東日本・家族応援プロジェクト(福島)を終えて

人間科学研究科　対人援助学領域　M1 田中凜太郎

今年で 8 年目になる本プロジェクト。私自身東北地方にはこれまで仙台に 1 回だけしか行ったことはなかった。震災時、私は九州に住んでおり、プロジェクトに参加するまでは震災の出来事は全てテレビやネットの向こう側に起きている出来事であった。今回福島プロジェクトに参加するにあたり、福島の第一原発事故を始め、避難した人のその後の行方について事前に調べた上で福島県に乗り込んだ。

1 日目。12 時半ごろ福島駅到着。私の第一声は「寒っ！」。九州・関西で生活してきた

私にとってとても寒さが身にしみる土地だというのが最初に思ったことだ。この日は次の日に「こむこむ」にて催されるクリスマスカレンダーやおもちゃ講習会、団先生の講演のための準備に勤しんだ。その後 NPO 法人ビーンズふくしまさんの「みんなの家」にて活動内容や食事会を行った。

2 日目。この日は前日に準備したイベントを行った。クリスマスカレンダーにて様々な親子を見た。一組一組で子供への教え方や子供の感受性を直接みることができた。作成後子供たちから「ありがとう」という言葉をいただき、心が外の気温に反比例して上がったのを感じた。その後おもちゃ講習会にておもちゃによるコミュニケーションの形成やおもちゃの効果についてのお話を聞いた後実際に遊んでみた。二十歳を超えてからこんなにもおもちゃに熱中するとは自分でも驚き、心から楽しんだ。その後は団先生の講演を聴講した。会場には事前にパネルや掛け軸で団先生の作品を見ることができた。団先生の作品を踏まえたうえで家族について考えさせられた。

3 日目。この日は朝からフィールドワークで飯舘村を始め、南相馬、浪江町を訪れ、最後は郡山駅にて本プログラムが終了した。

この 3 日間とても貴重な体験ができた。3 日間を通して一番感じたことは震災に関する問題はいまだに根強く残っているということだ。ビーンズふくしまさんの支援事業に仮説住宅でのコミュニティについて触れている活動と、フィールドワークにて放射線の怖さと現地の人が話す避難までの経緯、村に帰るべきか否かのワークショップは一連して震災が起きて 7 年経った今も苦しんでいる人がいるという事実に対して、事の大きさについて改めて認識した。最初に福島駅に降り立ったときに「寒っ！」と私は発言したが、現地の人々はいくつもの四季を過ぎてもまだ心に寒さが残っている状態であることを知った。

本プロジェクトにて学んだことは、メディアで得る情報とは違った生の、そして心身に突き刺さるものであった。震災の問題はまだ原発の責任訴訟や帰るか否かの問題は残っている。このことを知ってもらうことは勿論、被災した人々の心が温かくなるべく、寄り添う姿勢でこれからもこの問題に微力ながら向き合おうと思う。

最後に指導教員の方々をはじめ本プロジェクトに関わった皆様に心より感謝を申し上げる形で締めさせていただく。

東日本家族応援プロジェクト in 福島に参加して

対人援助学領域 M1　鍋内　千里

福島到着後，ビーンズふくしまが運営されている事業の一つであるみんなの家@ふくしまを訪問させていただきました。中鉢様よりビーンズふくしまの活動をご説明いただく中で，せめて孤立はしないようにといいう言葉を何度も使っておられるのがとても印象的でした。みんなの家@ふくしまは一軒家を活用して，スタッフの方による手作り感のある飾りつけがされていて，はじめて来たけれど親戚の家に遊びに来た感覚を持てるようなあた

たかさを感じました。孤立はしない，させない，の思いが隅々にまで浸透しているのだと感じました。

2 日目，クリスマスカレンダーづくりのプログラムに参加しました。お母さまどうしもお友達，お子さんどうしもお友達という参加者の方がおられ，このプログラムに興味を持ち，誘い合って参加してくださっていることがうれしく思いました。製作中は，はじめは子の作業を見ていたお母さま方が，モールやリボンを持ち，ボンドをつけて…と親子で一緒になって作業を進めていかれる姿が多かったです。行事やイベントを共に楽しみに待つ，共に同じことに取り組む姿はご本人達だけでなくサポートさせていただく私にとっても心温まる時間となりました。一方で，何かを楽しみに待つということは，今日の生活のつづきが明日以降にもあることを想定しているうえでできることで，地震発生時も，プログラムに参加してクリスマスを楽しみに待ってくれている子たちのように，４月からの入学，進級，就職をひかえ，新生活を楽しみにしていた方もたくさんいらっしゃったのだろう，とふと考えることがありました。

３日目，ふくしま地球市民発伝所の方に案内いただき，飯舘村，南相馬市などを訪れました。飯舘村ではじめてみたとてつもない量の除染土などの汚染物をつめたフレコンバッグの山にはことばを失いました。フレコンバッグの山の背景には木々の紅葉が広がった美しい山の景色があり，美しい景色とは不釣り合いなフレコンバッグの山，放射線量を示すスポット,そのものがいまの飯舘村の置かれている状況なのだと思いました。飯舘村で暮らすＩさんのお話をお聴きし，今まで知らなかった飯舘村こと，放射線量のことを知りました。

請戸漁港の防潮堤を見て，昨年度も参加したメンバーから１年前にはまだ防潮堤がなかったこと，海が見えたことなどを聞き，この１年間でこんなにも大きな防潮堤ができ，景色が変わったことを体感しました。

今回，自然と共生するということは，いったいどういうことなのだろうかと考えることになりました。現地を訪れ，その地に住む人にしか分からない海や風，天気の変化，わずかな変化を察知する知恵を受け継ぎながら生活してきた地への思い出や愛着とともに，防災への備えや地震や津波で自分が感じたことをまるっと抱えて生きていくことだと感じたからです。飯舘村のＩさんのお話から「この地域の方々に助けてもらって農業をはじめることができた，だからここにいる」ということばが思い出されます。その地でともに活動した,という思いは，力を与えてくれるのだと感じました。

プログラムを用意して下さった、先生方、現地でサポートして下さった中鉢さんをはじめとするビーンズのスタッフの皆さま，飯舘村等案内してくださった福伝の皆さま，すべての方に感謝を表して，終わらせて頂きます。

福島プロジェクトに参加して

対人援助学領域 M1 工藤 芳幸

11 月 30 日。JR 福島駅に降り立った時のしんとした寒さや淀みのない空気、強い風に東北を感じました。私の実家は隣の宮城県で、福島県は距離的にも心理的にも近しい場所です。しかし、震災以降、日々の仕事や生活だけでも精一杯で、頭の中には常に東北がありながら福島を訪れることがないまま過ぎていました。今回、東日本・家族応援プロジェクトに参加し、現在の福島を知る機会を得ました。

1 日目の 11 月 30 日夜、不登校支援や帰還者支援をされている NPO 法人ビーンズ福島の

方たちのお世話になり、福島市の子育て支援センターでもあるビーンズ福島の事業所「みんなの家」を訪問しました。そこでは福島からの避難者や帰還者の現状を教わり、コミュニティの中に入り込んだ援助について考える機会をいただきました。東北地方の面積は広く、事業の対象者が広域に散らばっているという特徴があります。都心部のように人口密度が高い地域に細分化した多くのサービス事業者がある状況とは全く異なる状況です。ビーンズ福島の広範囲をカバーする事業展開では、地域の特性に沿ったかたちを模索しているように思えました。2 日目に福島駅前にある「こむこむ」で開催された「東日本・家族応援プロジェクト in 福島」でのクリスマスカレンダーづくりやみんなの家での夕食会に訪れていた親子と関わる機会がありました。わずかな時間の出会いでしたが、あるお子さんから「1 歳のときに地震があったんだよ」ということばがごく自然に出てきたのが印象的でした。日頃の仕事で様々なご家族とことばを交わす機会がありますが、大阪に暮らしている子どもからはなかなか出てこないことばです。来訪されたそれぞれのご家族にとっての震災の記憶を感じた瞬間でした。「みんなの家」も「東日本・家族応援プロジェクト」も、ゆるやかに集う場所、立ち寄ることができる居場所であって、何気なくことばを交わせるような場所。そんな気がしました。振り返ってみると、スタッフの方にもう少しお話を聞いたら良かったという心残りがあります。これまで十分には意識してこなかったコミュニティの力についてもっと知りたいという思いに駆られました。

3 日目はフィールドワーク。ふくしま地球市民発伝所（福伝）の方々と飯舘村に暮らしながら放射線量測定の活動をされている伊藤さんにガイドをしていただき、飯舘村を中心に浪江町、南相馬とバスで移動しました。大阪にいては知り得ない、たくさんのソーラーパネル、仮・仮・置き場に並ぶ大量の放射性廃棄物、除染ができない山林。線量計の数値を見ながらのフィールドワークは安全・安心な暮らしとは何だろうかということを思わずにはいられませんでした。事前学習をしてきたものの、やはりその場所に立つことが与えてくれる力は圧倒的でした。

目には見えない放射線の問題。私たちの想像力が問われているのだと思います。急性症状が出るレベルではない低線量被曝。おそらく、その状態に慣れていってしまうのも人間です。何らかの症状が出なければ意識されにくい問題かもしれません。今回のプログラムでは、お話を聞くだけではなく「飯舘村に帰還する・しない・わからない」の選択肢を呈示され、「自分ならばどう判断するか」考えるグループワークもありました。健康リスクを評価することと家族がいかにして生計を立てていけるのかという両方の問題があります。参加者がそれぞれの背景や価値観に沿って自分なりの答えを出していく光景には一抹のリアリティがありました。福島特有の問題設定であるとともに、生活者としての知恵が問われるテーマと地続きなのだと感じたグループワークでした。

全体を通じて様々なことを学んだ 3 日間でしたが、一人ではなくチームでいろいろなことを感じ、共有することができたことは思った以上に嬉しいことでした。大阪に帰ってきてから私自身が大きく変化したことは、福島で見聞きしたことを誰かに伝え始めているこ

とです。震災復興も原発も遠い場所の問題ではなく、相似形の問題がどの場所でも起こり得ること。もっと震災のことも話して良いのかも知れないと私自身が思えるようになりました。そして、故郷である宮城ともに、福島もまた訪れたい場所になりました。

最後になりますが、お世話になった皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

東日本・家族支援プロジェクト（福島チーム）に参加して

人間科学研究科　M1 対人援助領域　杉山敏子

2018 年 11 月 30 日～12 月 2 日　東日本・家族支援プロジェクト・福島チームの一員として研修・フィールド調査に参加した。この 3 日間で体感した濃密な時間は私の“宝物”となった。

立命館大学と福島の人達・関係機関との温かい連携で、短期間でありながら多くの学びが得られたことに、まずは感謝したい。

経過

1 日目：福島駅 pm12:30 着。すぐ近くの“コムコムに“集合し、漫画展の設営。協力しての作業は、「身体活性化」して「チームとしての一体感」となった。私は、プログラム準備として”クリスマスカレンダー“の見本作りを担当した。クリスマスを楽しみしていた頃を忘れていて、幼少期を思い出しながら楽しく集中して作成した。夜は、NPO 法人ビーンズふくしま「みんなの家」で代表中鉢氏から活動報告をパワポ＆資料でお話を聞かせて頂いた。震災・原発事故後の多様な取り組みで、「**子どもも、大人も（親）も、地域も元気になり、生きる力を共に育てあう」活動**に感銘を受けた。「子どもたちが持っているレジリエンスを引き出す」活動であったと振り返っておられ、今後も「**協労して**いく」とのこと。夕食は、みんなの家スタッフと交流会となり、地元産の材料を使った美味しい料理で満腹。

2 日目：　東日本･家族応援プロジェクト in 福島　･市民の方と楽しむイベント

（団士郎家族漫画展･クリスマスカレンダーを作ろう･遊びの講習会･団士郎の漫画トーク）

“コムコム”開館時間より早く集合（ホテルより徒歩 3 分）して設営準備。

Am10:00～（クリスマスカレンダーづくり参加者受付）担当の班で 2 組の親子を迎ええ、手順通り作成をスタートする。父親と姉・弟、母親と姉・弟であった。院生は、見守るスタンスで臨み、カレンダー作りを通じて親子が（その家族らしい共通の時間を過ごしてもらい）楽しんでもらえるようサポートした。姉 2 人は共に 9 才でとてもクリエイティブな発想であった。カレンダーの数字をデザインしたり、25 日に向かっ

て 22・ 23・ 24 日が下から一気に上がっていたり、飾りの素材を組み合わせて貼ったりなど。父親ときた男の子も自分の発想を何とか表現しようとしていたが、本人にまかせ「そうなんか・すごいな～」と見守っており、姉には、「星形切りかた教えてね」などと会話していた。カレンダーづくりは、予定時間内に終了し「楽しかった！」と帰られた。

院生も遊びの講習・漫画トークに参加し、撤収作業・掃除で終了した。

私は、漫画展を見ていた 2 人の女性と会話した。近況から家族のお話になったのは、漫画のもつ力のように感じた。

夜は、香港料理店で交流しながらの夕食。名物の餃子を頂き、寒い風の中を徒歩にてホテルまで。

3 日目：フィールドワーク（飯館村→南相馬市→楢葉町）

am7:00 福島駅集合するとモニタリングポストがあり、**このような計測計がある日常生活の土地に居る**ことを感じて緊張した。1 日中**“ふくしま地球市民発伝所”さま**のご案内により、学習しながらの実地調査が体験できた。バス移動で福島第 1 原発事故後の長距離にわたるスポットを、解説を受けながら（資料もたくさんいただき）北部の飯館村から南下した。事前調査で得ていた知識が、現地で現地の方のご案内によって、自分の中で深まった。が、しかし、今後この体験をどう生かすかについては、私自身の課題である。

プロジェクト（福島チーム）を終えて

―福島の人とふれあい、繋がってー

3 日間で出会えた福島の人たちから、多くの「メッセージ」を頂いて、なんだか人生観が変わった気がして、（来春は後期高齢者になるというのに？！）喜んでいる。

福島の人の、

優しさ・おおらかさ・フレンドリーさ・粘り強さ・一生懸命さ・福島愛、にふれて、自分を振りかえったからである。

それは

一瞬にして地震・津波・原発事故の発災によって、心身に痛手を受け、それまでの生活が一変させられた中で、助け合い・励まし合い・乗り越えてきた福島の人の“今”を体現している姿である。みんなの家・漫画展・クリスマスカレンダーづくりでお話した人（子供さんも）や、そしてお世話いただいた方々に　共通するものであった。

美しい自然の中で、互いを思いあって暮らしておられた、今回お出会いできた方々に

これから　何時(いつ)も思いを寄せていきたい。　お元気で！

福島で地道に活動する方々の力

対人援助学領域修了生　NPO法人家族・子育てを応援する会代表　新谷眞貴子

５回目の福島の震災プロジェクト。私が、5年前参加するにあたって、後藤忍氏の「こころのケアとしての、〝減思力“の防止―『放射線と被ばくの問題を考えるための副読本』をつくって」を研究雑誌で読んだとき、被害者の心のケアを目指し、公正な判断力をつけるために、問題を大変分かりやすく説明している副読本に感銘を受けました。国の副読本や出前授業のおかしい点を指敵し、放射能汚染をどう考えたらいいのかを教えてくれました。そして、今回、後藤氏から直接フィールドスタディーを受けることが出来、原発事故や放射線を、本来人にどう伝えるべきなのかを具体的に知ることが出来ました。最も学んだことは、後藤氏の5年前と変わらず被災者に寄り添う真摯な研究姿勢です。福島県環境創造センター（「コミュタン福島」）の施設についても、後藤氏は、「汚染の程度や被ばくによる人権侵害の状況について判断するために必要な情報が少ない」ということも指摘していました。

「コミュタン福島」の展示を見ると、美しい福島の環境を回復させようとしているイベント的な展示が印象的でしたが、後藤氏が指摘されたように、行政の加害責任の説明や、放射線を防ぐことの難しさを理解できる展示がほとんどありません。小学校3校が入館していましたが、これで、本当に原発事故の教訓が後世に残せるのだろうかと思いました。「コミュタン福島」のスタッフの方は、福島県内の子どもたちは、今戻れない地域以外は、屋外で伸び伸び遊べるようになりましたと話されました。

しかし、飯館村内の身の回りの放射能汚染測定を震災後から続けておられる伊藤延由さんは、子どもたちが飯館村の学校で学ぶことを危惧されています。村内を案内してくださった時、スポーツ公園内の整備された美しいグラウンドで、子どもたちが楽しそうに遊んだり、競技したりしていました。一見とても平和な風景ですが、伊藤さんは、その様子を見て、「居住制限が解除されても、まだ子どもが立ち入れる環境ではないんですがね」、と子どもたちのことをとても心配されていました。莫大な除染資金を使っても、「効果と呼べるレベルには遠く及ばない結果」であるとも述べられていました（『高木基金だより No.46』）。伊藤さんが、役場の歌碑にある一節、「土　よく肥えて　人　情ある　その名も飯館　わがふるさとよ　実りの稲田に陽は照りはえて・・・」を大きな声で読み上げながら、言われました。「飯館村には、豊かな自然という宝物があった。」と。飯館に来て稲や作物を育てることが幸せだったと話された伊藤さん。心も食卓も豊かだった飯館村を愛する、その思いが伊藤さんを放射能汚染測定に駆り立てているように思います。

一方、ふくしま地球市民発伝所（「福伝」）の竹内俊之さん・藤岡恵美子さんからも、フィールドワークの中で、放射能汚染の様々な問題について聞かせていただきました。配布してくださった資料の、「福島ブックレット委員会」が発信する「日本のジレンマ」

（2018 年 7 月 1 日発行）では、「事故後も軽視され続ける原発災害リスク情報」の中で、「事故当時 18 歳未満だった子ども・若者のうち、すでに 199 名が甲状腺検査において悪性もしくは悪性疑いと診断されているにもかかわらず、甲状腺がん検査を含む福島県民健康調査も縮小が検討されています」とあり、「被災した人々の健康状態をどのように把握し、それをいつまで続けますか？」と最後に問いかけていました。

さらに、ＮＰＯ法人ビーンズふくしまの中鉢博之さんの「支援活動から見える福島の今」のレポートの中では、「復興に向かい、前進できる人と取り残されていく人の格差が年々広がっている」と聞きました。毎年中鉢さんからは、さまざまな立場の方の支援の場を作っておられることを教わります。それでも、復興から取り残されていく人は、これからどうなっていくのだろうと思いました。

今回、福島に来て、莫大な資金を投入して建てられた公的な施設「コミュタン福島」と、市民からの寄付金や市民ボランティアにより設立された「原発災害情報センター」をどちらも訪れて、情報を伝えようとする媒体の立ち位置で、受け手の意識は随分変わってくると思いました。「原発災害情報センター」を案内してくださった、アウシュヴィッツ平和博物館館長の小渕真理さんは、どうしようもない福島の現状に腹立たしさを感じながらも、福島の原発災害について科学的に正しく理解してもらうために、地道な展示や説明を続けておられました。

今回の福島の震災プロジェクトでは、とりわけ、被災者の立場に立って、子どもたちの未来を危惧して、地道に継続して活動しておられる、後藤忍さん、伊藤延由さん、小渕真理さん、中鉢博之さん、竹内俊之さん、藤岡恵美子さんから、福島県の現状と復興支援の課題に向かって活動されていることについて、丁寧に聞き取りをさせていただきました。怒りや虚しさといった気持ちが伝わってきます。それでも、課題に向かう支援活動の中に、人の粘り強さや正義感を感じました。

現状といろいろな方の思い・行動を知ること、今自分にできることを考えること、自分の活動につなげること、証人になること、それらの意味が震災プロジェクトに参加する度に深まってきます。また来年も福島に来させていただき、福島の現状の中で、継続している地道な活動とそこに生きる人から学びたいと思っています。

今年も福島の震災プロジェクトのプログラムは、昨年同様に開催されました。クリスマスカレンダー作りで出会った親子の笑顔、家族漫画展のパネルの一枚一枚の文字を丁寧に追う人、団先生のトークに耳を傾ける人に出会いました。そして、フィールドワークでは、現状を伝えたいと強く熱く語る支援者の声の響きが心に残ります。福島に来て感じたもの、また、この場所に来て初めて見えたものがあります。地道な粘り強い活動に人の力を感じ、私も、できることをひとつずつ丁寧にやっていきたいと思います。

「東日本家族応援プロジェクト　2018」に参加して
～福島の人が願う「日常生活」のために

人間科学研究科 博士後期課程　鈴木美枝子

はじめに

２年前、私は「OMEP 保育フォーラム in 福島」に参加し、フィールワークで、初めて南相馬に足を踏み入れました。津波の後、片づけられた更地に汚染された土をいれたフレキシブルコンテナバックが、黒いピラミッドのように高くあちこちに積まれている状況。帰還困難区域では、各家々の入り口にはバリケードが組まれ、当時の生活そのままが残されていました。５年という時間の流れで多くのものが廃墟化している様子を目の当たりにし、言葉を失った記憶は、脳裏に鮮明に残っています。その時に、原発事故で避難を余儀なくされ、避難解除と共に最初に戻り、そこで事業を始めた人が私たちに語ってくれた「ことば」が、いつも私のなかに問い掛けを続けています。そして、改めて下記の言葉を脳裏に浮かべながら参加しました。

「3 月 11 日は、私たちにとっては 365 日の中の一日。
3 月 11 日の震災によってゼロになった。
震災前は、いい人でいたかったが、震災後は、嫌なものはイヤと言える。
何をしても幸せに思う。
今は、新しい日常を積み重ねる日々である。
これを毎日続ければ「普通」になる。
普通でいたい。
普通が幸せ…」

今回参加したプロジェクトでは、下記の施設や地域を視察しました。

《原発災害情報センター》

本センターは、福島第一原子力発電所の事故を市民の力で風化させないことを目的に、寄付金とボランテアによって設立されたものでした。ホームページに掲げられているように「過去―現在―未来へつなげる」というキャッチフレーズの通り、事実に基づいた科学的な知識を得ることができる展示がなされ、初めて知る事実がたくさんあり、心が痛みました。

《福島県環境創造センター“コミュタン福島”》

福島県民の不安や疑問に答えるために、放射線や環境問題について、最新のテクノロジーを駆使した展示がなされており、素晴らしいものでした。しかし、気になったのは、その施設に訪れた子どもたちの感想です。掲示されている感想は、ほとんどがポジテイブな感想で、不自然さを感じました。

《飯館村》

本年４月に避難解除された地域の視察でした。新しい建物が並び、グランドも整備され、そこには小学生と思われる子どもたちがサッカーをしておりました。しかし、手に持ってあるいた染料計の数値は、場所によっては非常に高い数値を示しました。本当に、この状態で「人の健康」が維持できるのか、現地に足を踏み入れて考えさせられました。

最後に

東日本大震災で全てを失ってしまった人々が、新しい日常の中で一生懸命に生活をしています。しかし、今回の福島の視察で強く感じたのは「県民に、正しい情報が提供されているのか？」という疑問です。人災ではないかと言われている福島原発事故です。もっと、真摯な姿勢で情報供があってもよいのではないだろうか。そう思うのは私だけだろうか。何もできない自分ですが、これからも、福島について、関心をもち続けていきたいと強く思ったフィールドワークでした。

「東日本・家族応援プロジェクト 2018 in 福島」に参加して

人間科学研究科　博士後期課程　河野暁子

はじめに

私は元々関東地方の出身である。東日本大震災とそれに続く福島第一原子力発電所の事故があるまで、恥ずかしいことながら、自分が使っている電気がどこでどのように造られているのかを気にしたことがなかった。原発のことは聞いたことはあっても、関心を持ってこなかった。原発事故で初めて日本国内に 54 基もの原発があることを知った。そして、原発について関心を持たずに電気を使い続けてきたことは、あまりに無責任だったのではないかと感じた。放射性物質に汚染された土壌の除染は進んでいるのだろうか？　避難されている人はどんな思いなのだろうか？　故郷に戻ってきた方々はどのような生活を送っているのだろうか？　たくさんの疑問を抱えつつ、まずは現場に行ってみないとという思いで、福島プロジェクトへ参加した。

フィールドワーク

11 月 29 日に白河市にあるアウシュビッツ平和博物館を訪れた。ホロコーストについての数々の展示の中で、特に印象に残ったのは「Rescuers（レスキュアーズ）」の展示である。ナチスによる迫害に苦しむ人々を救おうと行動した者たちの写真と、その語りが展示されていた。抑圧に屈することなく行動した市民の姿は美しく、現代に生きる私たちにも力を与えてくれるように感じた。

続いて、アウシュビッツ平和博物館と同じ敷地にある原発災害情報センターへ向かった。展示写真は、原発を誘致してきた看板、原発事故が起こった後の混乱、絶望から自死を選んだ人の言葉等々があった。また除染作業着とフレコンバッグも展示されており、今なお大変な状況下にある原発事故の影響を想像することができた。

さらに足を延ばし、三春町にある福島県環境創造センター交流棟（コミュタン福島）を訪れた。子どもが楽しく放射線について学べるようになっており、テーマパークのようであった。「コミュタン最高」「楽しかった」「放射線が見えた」等々、コミュタン福島を訪れ

た子どもたちの感想が飾られていた。2 階には大きな電光掲示板があり、その場で書いたメッセージが映るようになっていた。「たのしかったー」「コミュタンはんぱないって」「ずっとここであそんでたいよ」等々のメッセージが右から左へ流れていた。しかし、私たちが原発に対しての不安をメッセージとして残そうとすると、その言葉は消されてしまった。たとえば、「原発大丈夫ですか？」と書くと、「原発大丈夫」と表示される。「こわい」と書くと何も表示されない。なぜメッセージが表示されないのだろうかと不思議に思っていると、2，3 人のスタッフが出てきて私たちの方を見ながら電話をかけ始めた。私はこの一連の出来事に大変衝撃を受けた。

29 日の夜、福島大学の後藤忍先生より「原発事故の教訓を伝える施設の役割」というレクチャーを受けた。チェルノブイリ博物館とコミュタン福島の展示を分析比較した講義で、チェルノブイリ博物館での展示は、原発事故を二度と起こしてはならないというメッセージを強く感じさせるものであるのに対し、コミュタン福島は子どもたちが楽しめる展示であるということだった。

11 月 30 日の午前中、飯舘村から避難しているご夫妻が福島市で開いている極久里珈琲へ行った。あいにくご夫妻のお話を聴く機会はなかったが、住宅街に溶け込んだ素敵なカフェであった。

30 日の夕方、福島市で子育て支援、困窮家庭支援等を行っているビーンズふくしまを訪れた。ビーンズふくしまでは、避難先から戻ってきた母親、避難しなかった母親が交流できる場を設けているそうである。夕食はビーンズふくしまが運営する食堂でいただいた。一軒家の和室でいただくご飯は家庭的な雰囲気で、とても暖かい気持ちになった。

12 月 2 日はふくしま地球市民発電所（福伝）の案内で一日フィールドワークであった。飯舘村住民も加えたセミナーでは、原発事故直後の避難の様子から、現在の放射線量や帰還政策のこと等々教えていただいた。学校や道の駅など、除染が進んだ所もあるが、フレコンバッグが積まれている付近や山中は放射線量が高く、完全に除染することは不可能であるとのことだった。それでも、飯舘村では帰還者や移住者を増やそうと、子どもの教育費を無料にしたり家を建てる費用を補助したりしている。同様に多額の復興予算で建てられた道の駅やサッカーグラウンド等もあるが、果たして村が維持していけるのか懸念されていた。

原発事故後、飯舘村に来た専門家は「安全だから大丈夫」と話したそうだ。その数日後に避難指示が出ている。専門家が間違った情報を与えたことで、飯舘村の人たちは被ばくしてしまったそうである。

グループワークでは、自分なら飯舘村に帰るかどうかを考え、「帰る」「帰らない」の選択をした。原発事故後の問題を自身のことと置き換えて考える有意義な時間となった。

セミナー終了後は、南相馬市、浪江町へと向かった。途中フレコンバッグの仮置き場がいくつもあった。移動していくと、いつのまにか家々のカーテンや雨戸が締まり、店もシャッターを下ろしており、避難指示が解除されていない地域に入ったと気が付いた。車は

走っているが歩いている人はいなかった。浪江町の請戸漁港から遠くに原発が見えた。あそこで今も作業をしている人たちがいるのかと想像した。

今回、避難指示が解除されていない地域には昼間に入ったが、夜はおそらく真っ暗になるのだろう。福島駅周辺はイルミネーションが輝き、店の看板は明るく照らされている。電気の明かりは夜でも安心感を与えてくれるし、華やかなイルミネーションは冬の夜をワクワクもさせてくれる。しかし、今でも避難を続けている人のことを思うと、私たちは電気の使い方を考えなければいけないのではないかと感じた。また、移動中、放射線測定器の数値を見なければ、放射線を感じることはまったくなかった。見えないものに侵されていく怖さを改めて感じた。

東日本・家族応援プロジェクト

12 月 1 日、ビーンズふくしまの協力のもとプロジェクトが開催された。午前中は「クリスマスカレンダーをつくろう」であった。私が付いたテーブルでは、親子で思い思いのツリーを作り、みなさんとても楽しそうであった。家に帰った後、このカレンダーを飾り、クリスマスまでを楽しみに数える親子の姿を想像し、私も少しうれしくなった。その後はおもちゃ講習会、団先生の漫画トークと予定通り進み一日を終えた。

おわりに

その土地を訪れないと知ることができないことがあると改めて思った。福島に関しては、福島の現状をどのように伝えようとしているのか、その人や団体によって、受け手となる私たちへ与える印象がまるで違ってしまうと感じた。原発事故や放射線の危険について、事実をそのまま訴えている人たちと、放射線は安全だという印象を与えようとしている施設の両方を体験することができ、とてもよかったと思う。福島での学びを通して、今後は私自身がどう行動するのかを考えていきたい。

最後に、今回の福島プロジェクトでお世話になった方々に心より感謝申し上げます。

「東日本・家族応援プロジェクト 2018 in 福島」に参加して

人間科学研究科 博士後期課程 張亦瑾

台湾の原子力発電反対運動はいつも「もう 1 つの福島はいらない」というスローガンを掲げているので、台湾人は「福島」というところをよく知っていると考えた。しかし、事故以前の福島はどんな様子か、または事故後の福島の人々はどのように考えているか、私も友達も知りたかった。なので、私は今回のプロジェクトに参加し、イベントとフィールドワークを通じて情報を得た。参加すると、私はまだ詳しく福島の状況が理解できていないことに気づき、自分の中に変化が起きた。今の福島と聞くと、人々はすぐに「原子力発

電所の事故」を思い出すかもしれないが、過去の私も同じだった。その結びつきが強いのだ。しかし、プロジェクトに参加する中で私は「福島は事故のことばかりでなく、まだ様々な活気がある」と感じ、その「福島＝事故」というイメージが消したと気づいた。学者、NPO、またこの故郷での復興をあきらめていない人々の行動が、私は福島の力になっていると感じた。

放射線の問題は解決できないかもしれないが、私たちは福島県の環境創造センターコミュタンで意外にも放射線について、ポジティブな説明をしてもらった。一方で、学者に、また私的博物館では、放射線のリスクについて説明された。福島へ行く前に、私たちも福島大学の後藤忍先生の「みんなで学ぶ放射線副読本」を読んだ。その上で、実際に後藤先生のレクチャーを受け、原発情報センターを訪問し、地球市民発伝所（福伝）の竹内俊之先生の説明を聞いたので、放射線のリスクはよくわかっていた。また、私たちもビーンズふくしまと連携するし、施設とイベントを通じて実際に市民の人々と話した。災害と復興の話題を出さなくても、私は人々が子供を大切にしている雰囲気があることに気づいた。既に避難指示が解除された飯舘村に戻った伊藤さんの話を聞くと、「困難があっても立ち向かって行きたい」という力強さを感じた。このように、災害の影響はまだ残っているのに、人々は自分の方法で地道に暮らしてきたと考えられる。

まだ放射線の問題があり、住民が安心に暮らせないような福島を見ると、確かに悲しいと感じたが、「もう１つの福島はいらない」というより、今の私は「新しい福島になってほしい」と感じた。今後も福島の復興を応援したい、参加したいと考える。